

「美しいと思うもの」②

「一段落目」自分が美しいと思うものにはどんな条件があるか

(例)

美しいなんて思うことはめったにあるもんじゃない。というか、普通はたいいてい美しくない、と思う。それでも一つだけ言えるのは、美しいと思うものは、ただ美しいと思うから美しいんだ、ということだ。何かと比較したりして、「これはあっちより美しい」なんて言うのはばからしい。私が美しいと感じることが、美しいものの唯一の条件だと思う。

「二段落目」一段落目に提示したことについての説明。

(例)

世の中には、ミスコンやフィギュアスケートのように、美しさを競い合う大会などがある。そういうのをテレビで見ても、いったいどういう基準でこちの人があつちの人より美しいとされるのか、いつも理解できない。私がいいと思った方が負けることもよくある。そういう時は、自分の感覚が否定されているみたいで、なんだか少し腹立たしい。でも、気にすることはないだろう。美しいかどうかなんて、比べられるものではないからだ。私が美しいと感じなければ、何かの大会で一位になったものであろうと、そこに美しいものなんて存在しない。美しいという思いは、私の中で起きる現実で、他の人が決めたものなんて意味を持たない。

「三段落目」具体的な例や体験を挙げながら、意見を展開する

(例)

私が小学校の五年生の時の教頭先生は、頭の禿げた太った人で、そのくせ生徒にやたら厳しい怖い人だったので、正直みなに嫌われていた。私も嫌いだった。デブぎつねと呼んでいる子さえいた。目が細く、いつも鋭くにらんでいるような目つきで、とても威圧感があつたというか、近づくと怒られそう、実際怒られている子もたくさんいた。

その年の運動会の予行練習でのことだ。六年生の競技に組体操があつた。いくつかの演技の後、最後の方で四層ぐらゐのタワーを作ろうとしていた。二層目、三層目と組み上がり、四層目の子が立ち上がろうとした時、それが崩れた。と同時に、折り重なって倒れていた六年生たちの塊に、誰よりも速く駆けつけるデブぎつねの姿があつた。そして、生徒たちを一人ひとり大事そうに介抱していた。やがて、彼は一人の男子をおんぶして、走って校舎の中に消えていった。けがをしたのはその男子一人だけだったので、予行練習はそのあとにも続いた。予行練習の終わりに、保健室から帰ってきていた教頭先生は、短く「けがをしないように」とコメントした。その姿が、今も印象に残っている。

「四段落目」結論・まとめ

(例)

その日のデブぎつねは美しかったと思う。その後、私は教頭先生のことを嫌いではなくなつたが、だからと言って美しいと感じることはもうなかった。あれはあの日だけのことだが、一瞬でも美しい姿を見せることのできる人は、カッコいい人だと思う。